

盛岡藩領における宝暦五年の飢饉

細井 計

はじめに

凶作とは農作物の稔が非常に悪い状態をさすが、その原因としては、霖雨・低温などによる冷害をはじめ、旱魃・風水害・病虫害・霜害などの自然的な災害を中心として、時には野獣による被害の場合もあった。この凶作を契機にして、食料が欠乏し多数の飢人と餓死者を出す現象を飢饉というが、この現象は前近代社会における人為的な災害ともいってよい。⁽¹⁾

「きん^(飢饉)んは人間世界の大変也⁽²⁾」といった鈴木正長（俗称武助）は、「下野黒羽之執政、而夙有循吏之誉⁽³⁾」と評された人物である。その彼は飢饉の対策として、

人たるもの一生の間に憂とすべき事多しといへども、その中に饑饉を第一とせり、これに越し大難はなし、むかしより度々ありし事たれば、書物にかきもつたはり、又は年よりの物語にもする事なれば、此用心をしてきん^(飢饉)んに備べき食物の貯を、かねてより設置べき事也、⁽⁴⁾と、貯穀の必要を力説している。

記録の上から知られる日本の飢饉は、欽明天皇二十八年（五六七）から明治二年（一八六九）までの間に大小合わせて二二五回、このうち江戸時代（慶長八年、一六〇三）慶応三年、一八六七）の二六五年間だけでも三五回に達している。⁽⁵⁾ この数字によれば、江戸時代は七〇八年に一度の割合で飢饉に襲われたことになる。

鈴木正長の「農諭」をみると、近世の飢饉は「近ければ三、四十年の間にあり、遠くとも五、六十年の内には来るとおもふべし⁽⁶⁾」と指摘されているように、周期的に襲来したといわれている。中でも享保・天明・天保の飢饉は近世の三大飢饉といわれ、これに宝暦五年（一七五五）の大飢饉を加えれば四大飢饉ということになる。

盛岡藩領の凶作（減作率が前年比五〇パーセント以上）の発生回数を見ると、元和三年（一六一七）から慶応三年（一八六七）までの二五〇年間に六六回に達している。これは約四年に一度の割合で凶作に見舞われたことを意味している。北奥州という寒冷地における水稻経営が、科学的知識や農業技術の未発達とあいまって、いかに不安定であったかを示しているといえよう。さらに飢饉化した年は一七回を数える⁷⁾。これは約一五年に一度の割合で大凶作・飢饉に襲われたことである。そのうちでも特に、元禄・宝暦・天明・天保の飢饉は被害が甚大で、盛岡藩の四大飢饉と称されている⁸⁾。

宝暦年間（一七五一〜六四）の盛岡藩主は、享保一〇年（一七二五）から宝暦二年（一七五二）まで在職した八代南部利視（大膳大夫、天量院）、次いで宝暦二年から安永八年（一七七九）まで在職した九代利雄（大膳大夫、養源院）の二人であった⁹⁾。

さて、利視が藩主であった宝暦二年までは、元文元年（一七三六）の大飢饉と寛延元年（一七四八）の凶作を除けば、取り立てて問題となるようなこともなかった。しかし、利雄が九代藩主に就任した宝暦二年以降は、同三年凶作、同五年大飢饉、同六年飢饉、明和四年（一七六七）凶作、安永元年（一七七二）・二年・五年・六年と凶作に襲われている。

本稿では、盛岡藩領における宝暦五年の大飢饉を中心にして、盛岡藩家老席日記である「雑書」¹⁰⁾と岩手県立図書館に所蔵されている「自然未聞記」（しぜんみもんき）を主たる史料として具体的に考察することにする。

第一節 飢饉を生み出す要因

北奥州に位置する盛岡藩は、南の仙台藩境から北は下北半島に至る広大な所領を有していたが、そのほとんどが山林原野によって占められていたため、耕地は思いのほか少なかった。その耕地ですら生産力の低い状態にあった。しかも、天候・気象に起因する自然的な条件や農業技術の未成熟な発達段階などから考えると、盛岡藩領、とりわけ盛岡以北は水稻経営の限界といってもよい地帯に属していた。それにもかかわらず、盛岡藩がつねに財政的基盤を水稻生産力に求め、畑作よりも水田を中心とした水稻経営を強制したのは、当時の幕藩社会が石高制に基づいていたからであり、そのため盛岡藩では気象条件に左右されて、畑作よりも田作を中心に凶作の発生率が高くなったのである¹¹⁾。

そのうえ盛岡藩では、徳川家康の側近であった本多正信の著といわれる「本佐録」に、

百姓は天下の根本也、是を治るに法有、先一人／＼の田地の境目を能立て、初一年の入用作食をつもらせ、其余を年貢に収へし、百姓は財の余ら

ぬ様に不足なき様に、治る事道なり、毎年立毛の上を以納事、古の聖人の法也、¹²⁾

と記されているように、剰余部分をすべて年貢として収奪しようとする江戸幕府の農民政策を最も忠実に実行したので、「農は納なり」という言葉のごとく、重税にあえいでいた農民の生活は苦しく、そのために凶作の程度は軽くとも、常に飢饉に転化する恐れをはらんでいたのである。

飢饉は主として自然的な災害に基づく凶作を契機として、食料の欠乏が原因となって多数の飢人や餓死者を出す現象であるが、しかし、それは単に自然的な災害だけに起因するのではなく、前近代社会における科学的知識や農業技術の未発達、さらには政治・経済といった諸制度とも密接な関連をもっていた。

江戸時代の領主権力は、幕藩制的市場構造の特質に規定されて、飢饉移出ともいうべき領内米の江戸や上方への販売を余儀なくされていた。このことが飢饉を生み出す重要な原因の一つとなっていたのである。一方、凶作時に実施された大名領ごとの津留が、他領の飢饉を一層激化させたことも周知の事実である。また、凶作や飢饉の対策にしても、それが領主単位で個別に行われたために、政策のいかんによつては飢饉の程度も大きく異なっていた。これらのことを考え合わせると、飢饉は幕藩領主支配のあり方とも深く関わっており、そういう意味で、前近代社会における人為的な災害であったともいうことができる。¹³⁾

第二節 宝暦五年の飢饉

九代藩主南部利雄治世の宝暦五年（一七五五）は、正月から在町ともに次のような風聞がささやかれていた。

当年ハ元禄八年乙亥年一巡ニ相当、六ヶ鋪年、殊更去冬ハ曆極月の末ニ下り、在町共ニ風聞ニハ、元日は日（食）しよくニ相あたり、依て天下の不吉、¹⁴⁾
乱世のもとひなるらん、……元禄八年元日頓て日（食）しよく、此年飢饉ニ及ぬと、此事専ら在町共ニ風聞する、¹⁵⁾

宝暦五年は元禄八年（一六九五）の大飢饉から六〇年目にあたり、しかも暦によると、元日が元禄八年と同様に日食となっていたので、天下の不吉、乱世の基となるだろうと、正月から心配されていたのである。その心配は現実のものとなり、四月末頃から初葺が出るようになり、「たん（端）こ節句晴天静日、然れとも今日迄も拾綿入」¹⁶⁾を着用し、六月は「陰々として不勝の天気、……雨ふり候故、土用中虫干する程の晴天静日ト申ハ無之、土用過に至て日和ひろい／＼虫干」¹⁷⁾をした。しかし、当年は麦が近年にないほどの豊作であつたので、「盆前後迄も凶作に可成とは、諸人夢々知らず暮し」¹⁸⁾ていたという。

七月になると、「三日朝より北風吹、夫より日々曇、或ハ小雨又南風と変、打続雨天冷氣、遂に暑氣なし⁽¹⁸⁾」という状態となった。降雨が続いたので、盛岡五ヶ寺の筆頭である永福寺に対して、七月十七日から二夜三日にわたる「止雨五穀成就」の祈祷が命じられている⁽²⁰⁾。そして「春中より以之外不順也、偕又頃日迄も陰々として次第二冷しく、盛岡井在々不申及、新田の分、当月末迄植候保⁽¹⁷⁾にて、中々実のる所見得ず、奥通猶更、八月始頃には段々稲の葉しほみ、追日かれ候、馬草ニ計刈取⁽²¹⁾」るようになり、「次第ニ米穀高直相成、諸人驚天嘆⁽²²⁾」していたが、それでも「餓死之ものも無之、勿論飢人も一切相見得不申候」と、飢人や餓死人の出現には至っていない⁽²²⁾。

八月に入ると、「十日朝大ニ霜降、又廿七日朝大霜ニて田畑共ニ霜枯、遂ニ大凶作と成⁽²³⁾」った。全般的に「米不足故……金錢握候得て米調兼候者ハ、蕎麦、大豆、大麦、小麦之類飯料ニ仕、是而已罔無之もの、又ハ調かね候ものハ纔一兩日か内、小竈のもの大こん、朝夕又それも行当候ものハ、無扨一飯に梨子を煮候て食候杯と専ら」の風聞であり、「是飢人乃出始ト成、目も当られぬ風情也⁽²⁴⁾」という。

領内第一の本身であった八戸弥六郎は、知行所の遠野について「当年至て不作の上、去ル十六、七日兩晩之霜⁽²⁵⁾ニて田は青絶、種分も実申間敷、畑は三分一二も実兼可申由ニ御座候旨、見分之もの申出、相違無之相見得候段」を藩庁へ報告している⁽²⁶⁾。

このような状況をふまえて、藩主利雄は九月朔日付で、次のような凶荒報告書を幕府に提出している⁽²⁶⁾。

私領内、当五月中旬より大雨降続、同下旬、川々壺丈程之洪水ニて川添之田畑所々水押等有之、六月上旬より土用中雨繁、冷候て暑無之、稻長兼申候、七月中も日数廿日余雨降、折々北風吹、快晴無之冷申候、八月ニ至候ても雨降、或ハ天氣候得共冷強、同十六日、十七日兩朝霜降、同下旬ニ至候迄不順御座候て山根通ハ不及申、本田共出穂悪敷、実成不申様相見得、全鉢出穂無之場所過半御座候、右二応、畑形井家中へ為取置申候知行所等も右同前御座候、稲刈取候上、委細之儀可申上候得共、先ず此段申上候、被御聞置可被下候、以上、

九月朔日

南部利雄
御名

さらに九月十四日には、他領からやって来て逗留している者は、「数日逗留無之様」に致し、早く本所に帰らせる。そして他領の商人で「無益之商物等持参」している者をはじめ、「口談師、浄瑠璃語、狂言役者、……無用之者」などを逗留させないようにすることが町奉行に申し渡された⁽²⁷⁾。九月二十五日になると、「頃日端々近在において畑物を盗取候付、畑主見咎候得は、却て畑主を打擲致、疵を付、切殺可申鉢相働候段訴出候」とあるように、飢饉により畑作物を盗み取り、その上、強盗殺人に至るような事件が発生していたことがわかる⁽²⁸⁾。

十月に入ると、諸代官に対して詳細な指令が出されるようになった。やや長文ではあるが、実情がよくうかがえるので、次にその全文を紹介する⁽²⁹⁾ことにしよう。

一当年領分中、近年ニ無之不作ニ付、諸民困窮之時節ニ相成、別て百姓可及困窮、此節諸民救之手当等も可有之事候得共、段々無抛物入打続候上、蒙大用、莫代之物入に付、難相届、此処至て氣遣鋪、因是諸代官共別て此節抽丹精、心を用可相勤儀候、第一百姓共食物只今之内ハ如何様ニも可致候得共、冬至候ハ、貯も乏敷相成可申候、左候ハ、無抛押て願出候筋も可有之哉、此砌外聞共ニ大事之時節ニ候間、別て百姓共、右心得之儀無之様、兼て厚諸民江懇ニ申含可置事肝要候、尤他領境近者共は、若心得違他領江罷出申儀も可有之候、当年ハ他領ともニ不作之由粗相聞得候、縱他領江相越候共、自飢渴及可申候条、右鉢之存念も無之、救之致方も銘々心得可有之事候間、何も此処を存、勤趣尽精力可申事、

一惣て古百姓共之儀ニ候得は、往々恩沢を請、永く相続罷有候者共事ニ候得は、土民と申なから慈愛之重を存におゐてハ、ケ様之節專心得之可有之事ニ候、然処心得違他領江罷出、或城下江罷出、強訴等ニ及候儀は、外聞ニも相懸り申事と深勘弁いたし候ハ、他領江相越、或徒堂かましき存念も決て有之間敷事候、縱食勞飢渴及申共、無是悲事と思ひ詰候ハ、於領内如何様ニも凌居候儀可為本意候、如是之節を熟と申含、何ニも菜草之類にても貯置、及渴命不申様銘々支配所限手を尽、為相働可申事、

一銘々支配所限百姓共手当之節、兼て其所を預置候者ハ、ケ様之節了簡も可有之事ニ候、若左様之存寄も有之候ハ、何儀成とも無遠慮懸目付共迄、先内々申熟と得加談、其上事之宜ニしたかひ、目付共差図次第表立可申出事、

一当年は他領共ニ不作之由相聞得候間、他領之ものハ領内江入来候儀も間々可有之候、兼て其所肝煎、檢断なと江申付置、右鉢之者参懸候ハ、様子相尋候上、当領も不作ニて諸民及難儀候間、縱此所徘徊いたし候とも却て可及渴命候条、立戻候様ニと叮嚀ニ申含、相返候様可致候、若向々用事有之、罷通候杯と申者有之候共、容子怪敷鉢ニ相見得候ハ、其向々江送を付遣可申事、

一代官共支配限自身ニ相廻、万事之儀見届致吟味候様可仕候、尤平生と違、此節別て諸事所々痛ニ相成不申様、縱無抛人夫等為差出候とも、随分致減少、百姓ともいづれニも迷惑無之様心を相用、私を相慎可申事第一候、畢竟支配所相廻候ニハ万事心得之可有之事ニ候、尤火之元用心并盜賊等之吟味、兼々申渡候通、弥無怠可申付候、勿論博奕諸勝負事等儀も此砌猶又無由断稠敷可申付事、

一諸代官所江他領之者参居候ニ付、近年書上申付、年々書上置候、右之者共、當時商買筋取組渡世仕候共、此節自然と万事不通相成候てハ、渡世之致方も有之間敷候条、銘々本所江戻候様可為仕候、乍然其筋能遂吟味、無理非道無之様相有取扱可申候、自然差支之儀も有之おゐてハ其筋江申出、相伺可申事、

一他領より當時参懸、諸商買仕候者共も右用事差急相弁、永く逗留不致様ニ宿并檢断共取計可申事、尤無益之商買物等持参申者逗留不為致、早速相返候様、片言無之取扱可申候、此末罷越候他領之者、右之心得を以遂吟味、無抛筋ハ格別、講談師、淨瑠璃語、狂言役者類は勿論、都て無用之者

逗留不致候様可為仕事、

附、都て町方ニて商売致候物品々之内にも遂吟味、無益之品は為相止、民之費に不相成可仕事、(様脱之)

一領内ニて米穀并雜穀商賈之儀、在々ニては近郷村々、他之代官所江も相互勝手次第売買可為仕候、尤從盛岡在々江差出候義ハ弥堅停止申付置候、在々より盛岡江相出候事、是又勝手次第可為仕事、

附、他領江相出候事、從前々申渡候通、此節尚又停止申付置候事、

一当年檢見領分中不殘申付候、因是取納之儀ハ吟味之上追て可申付候間、此旨兼て相心得罷有、諸役金錢并諸上納物嚴重ニ取立可申候、此節之事故、若百姓とも難渋等有之おゐてハ吟味之上、急度可申付候間、此趣百姓共江も粗申含置取立可申候、尤当年柄之事故、百姓共難儀ニは可及候得共、公用勤之儀大切之儀故、無抛申付候、右付、取納之儀ハ猶又格別重事故、是等之趣堅可相心得事、

一捨馬之儀、前々從、公義被仰出候通、弥堅可相守候、若捨馬仕におゐてハ曲事可申付事、

右之趣今度別て申付候間、堅可相守者也、

亥十月

右によると、第一条では、宝暦五年の盛岡藩領は近年にない不作のため、困窮した領民を救済しようにも、日光本坊の修復手伝いによる莫大な出費のため、それも難しい。そこで代官たちは、食物がなくなつた農民が無理やり願ひ出たり、他領へ逃亡したりしないように尽力すること。第二条では、強訴、徒党を禁止すると共に、「菜草之類にても貯置」、渴命に及ばないようにすること。第三条では、各支配所の農民の手当については、目付と相談し、その指図を受けること。第四条では、他領者を丁寧に諭して立ち戻らせること。第五条では、火の用心と盜賊吟味の励行と博打を禁止すること。第六条では、他領商人を本所へ帰らせること。第七条では、無益の商品持参の他領商人や無用者を逗留させないこと。第八条では、米穀類の他領出しを禁止すること。第九条では、検見の上、諸役金錢や諸上納物を厳しく取り立てること。第十条では、捨馬禁止令を守らせること、等々が城中柳の間において、北民部節繼らの家老全員出席のもとで代官に申し渡されている。

さらに十月二十二日になると、次に掲げるような詳細な凶荒報告書（損耗高届書）が、江戸留守居役の尾崎富右衛門から月番老中の松平右近將監武元に提出されている。³⁰⁾

一去ル廿二日、御領分御損毛高御届書被差出候写、左之通、

私領内先達て申上候通、当五月中旬より大雨降続、川々洪水等有之、八月まで天氣不順御座候處、同月十六日、十七日兩朝霜降、其以後弥増

冷強、田畑実入不宜、皆無之地数多有之、領内人数も多候付、民飯料取続之程無覺束御座候、検見為仕、遂吟味候処、本高^并新田高之内、損毛左之通、

本高拾万石之内、

一損毛高七万七千七拾石余、

内

一七万三千百拾三石余

不熟損毛高

一貳千五百六拾三石余

水押損毛高（水押当毛荒）

一千四百九拾四石余

水押永代荒

新田高拾四万八千石之内

一損毛高拾貳万貳千五百三拾石余

内

一拾壹万三千五百拾五石余

不熟損毛高

一六千貳百貳拾貳石余

水押当毛荒

一貳千七百九拾三石余

水押永代荒

損毛高合拾九万九千七百石余

一人馬怪我無御座候、

右之通御座候、此段御届申上候、以上、

十月十一日

御名
（南部利雄）

これによると、本田一〇万石のうちの損耗高は七万七千七〇石余、損耗率でいえば七七・二パーセントということになる。同様に新田一四万八〇〇石のうちの損耗高は一二万二五三〇石余、この損耗率は八二・八パーセントに及んでいる。田畑合計の損耗高は実に一九万九七〇〇石余に達した。いかに被害が大きかったかが知られよう。しかし、宝暦五年は麦が豊作だったので、この届書が作成された十月十一日現在では、「一人馬怪我無御座候」とあるように、飢饉の被害はまだ出ていなかった。

盛岡藩領における宝暦五年の飢饉

これが十月の中旬頃から「近在より鼠路く飢人出」て、盛岡城下を流浪するようになり、「飢渴する程の者共ハ、生産の子、野山又は川江捨候事夥しく有之候、右程之義故、大小共ニ氣質不宜、所々在町共ニ家毎に小盗有之候」という状態になった。⁽³¹⁾そして十一月に入ると、雫石、田頭辺りの者たちが、手廻りを引き連れて勧進に出かけるようになり、また「秋一切穂もの苅取不申者ハ頃日ニ至」り、ぞろぞろ餓死に及ぶようになった。このような状況のもとで、「御領分中凶作といへども、就中雫石、其内ニも永山、川目、しの崎辺、又沼宮内ニては田頭、大更山方辺也、盛岡近在ニは玉山村、米内村、其外御代官所之内、奥筋三戸、五戸、七戸迄三ヶ所也、市戸、福岡相応之由、然所雫石、沼宮内ハ凶作の一番也」と伝えられているように、雫石通の長山、川目、篠崎と沼宮内通の田頭と大更の山間部の被害が大きかった。

十二月初め頃から盛岡城下の「軽渡世の産（生業）」の者が飢渴し、中には餓死する者も出るようになり、また、川原町舟橋や夕顔瀬橋で夜中に子供を川に投げ捨て、自身も入水死する者もいて、「様々変成事聞も恐しき為^{テイクラク}、言語道断なり」という。さらに、城下では飢人が富裕者に米銭を強要し、「村々ニては夜中押込、米穀勿論衣類はぎ取候由、其上火難等ニ逢候やからも有之、放逸むさん成事共なり」と、残酷な様子を伝えている。⁽³⁴⁾

こうして城下には、「飢渴^井餓死のもの」がぞろぞろ出てきたので、検断たちは連名で、次のことき願書を町奉行所に提出した。⁽³⁵⁾

乍恐奉願上候事

当作毛格別不宜候付、米直段以之外高直仕候之处、為御憐愍、定御直段被 仰付、通用被成下、当秋より御町之者共相続罷在難有仕合奉存候、然処頃日至甚高直仕、先以沓町限輕者共渴命之為^ハ歟、其上餓死仕候者間々相見得申候、因茲、御憐愍御救之儀奉願上度旨、町内組頭共申出候、不顧時節取次申上候儀、恐多奉存候得共、沓町限之手当可仕様無御座、不得止事奉願上候、以御慈悲、輕もの共江御救米被下置候様、御相談被成下度奉存候、以上、

宝暦五年^亥十二月十二日

御町廿二町検断惣連名

米内長太夫様

築田平右衛門様

右の願にもとづく救助米の支給は、宝暦六年の四月十四日からとなったが、同五年の十二月十四日からは、久昌寺が「施行粥」を炊き出して飢人の救済に乗り出した。その時、門前に立てられた札には次のごとく記されていた。⁽³⁶⁾

此度飢人為活命、粥施行、尤望次第御志之御方米穀売不限、薪、塩、味噌等御施行頼上候、以上、

亥
十二月十四日

施行所

久昌寺

久昌寺で粥の炊き出しが始まると、「最初ハ御町住居之者、貰二行を以之外恥辱に思ひ、己と飢ルもの有之候、依て町端近在の者、御町之者も子共計廿人、三十人位宛、在之者と交り貰二行、兎角飢ニ疲れ候故、何之面目飾へき、御町住居之者も我先と貰二行、末には在之者より御町之者数人参候」という状況になった。⁽³⁷⁾

飢人どもは銘々久昌寺の門前に藁や菰(こも)で小屋を懸けて、一日一度の粥施行を受けていたが、翌年の正月二十日までに餓死者は二八、九人に達した。次いで報恩寺でも、十二月二十八日から粥施行を開始すると、日を追つて「遠近在の者」が城下に参り、

猶更翌正中ハおひたしく銘々庭(ニテ)こも荷(カ) 碗又ハ釣桶持、門をかぞへ、不便と思ひ忝人ニ呉候ハ、さいご及見及聞、追々跡より引続、……飢饉の事昔語に元禄年中飢饉ニハ、ケやうく(と)と聞伝しか、今日前なり、在々ニてハ村々同士飢人貰二あるく、然処相応ニも暮居候もの江参、何ヤかヤト乞、無慈悲之もの有之候得ハ、飢人共コッ挙て其無慈悲なるもの江夜中押込、或は放火いたし、誠に放逸言語道断也、⁽³⁸⁾という。

このように、宝暦五年の十二月中旬以降になると、城下の久昌寺と報恩寺が飢人の救済に乗り出した。しかし残酷悲惨な状況は悪化する一方なので、翌年正月、盛岡藩では飢人救済資金を捻出するために、城下商人に対して「借上」を命じた。次に掲げる「覚」がそれである。⁽³⁹⁾

覚

去年凶作ニて、飢渴人有之段相聞得候ニ付、此度御救之儀被 仰出候、依之、右御入用金浅岸村杉山井盛岡在々共ニ、境内之杉御連上御出シ被成候、乍去御連上金早速之御用ニ相立兼候ニ付、右御連上御引当ニて、其方共より金貳千貳百五拾両当分御借上金被 仰付候、右金方之内、別紙月割之通上納可仕候、此節之儀故、別て御町之者共差支可申儀ニ候得共、当時御救之御手当難被相止重キ御儀候間、銘々御太切之御事と奉存、出情上納可仕旨被 仰付、

子 正月

右からも明かなように、城下の商人から二二五〇両の御用金を上納させ、それを資金として宝暦六年正月、城下の永祥院と円光寺に藁葺きの小屋(お救小屋)を建て、一月二十一日から飢人の救済を開始した。お救小屋は永祥院のものが七尺間にして幅四間、長さ三〇間建てて、一五間づつで中を仕切つて男女を分けていた。円光寺の小屋は七尺間にして横四間、長さ四〇間であった。二月末には永祥院小屋に一一七〇人余、円光寺小屋には一三五

○人余の飢人が参集したので、さらにお救小屋を両寺に一ヶ所づつ建てさせている（永祥院には四間に二五間のものを増築、円光寺にも四間に三〇間のものを増築^⑩）。

そして一人一日米八勺（約一四四グラム）の割合をもつて粥にし、朝夕二回づつ施行した。しかしそこの「施行粥」は一升（約一・八リットル）の水に対し米八勺しかなく、あまりのひどさに飢人たちは、「南無カユ陀仏、ウスイ菩薩」と唱えていたという。こうして毎日五〇人前後の飢人が餓死あるいは凍死を余儀なくされた。その数は宝暦六年一月までに、「永祥院にてハ都合千四、五百人程、円光寺にてハ都合七、八百人余^⑪」に達した。

この時のお救小屋の実情は、「惣して先年より饑饉の節、御小屋^江入候飢人ハ大方残すくナに餓死いたすものと云、当年も果して千人居候内、八百人までは餓死ト相見得、行所も無之ものハ是また右御小屋にて餓死す^⑫」というものだった。

宝暦五年の飢饉による餓死者は四万九千九百九十四人（内、男三万九百九十三人、女一万八千六百一人）、空き家が七〇四三軒半にも達し、なかでも三戸郡五戸通の餓死者は一万一千九百二十七人と最高を示し、ついで雫石通、福岡通、沼宮内通の被害がひどかった^⑬。なお、餓死者のうちの五九〇七パーセントは男性であった。飢饉時に強い女性の一面がうかがえる（表1参照）。

次に、宝暦五年における欠落者と火事についてみてみよう（表2参照）。欠落者は行方不明を含めると三三二二人に達する。欠落者が多かった月は十一月の八五人で、全体の約二六パーセントを占めている。次いで十二月、一月から三月までとなり、いずれも食料が欠乏する時節に逃亡していることがわかる。火事についてみると、三月の出火件数が一件、類焼が七二件と多かったため、三月二十九日には、家老から「此間在々二度々出火有之訴出

表1 宝暦5年の飢饉被害概要

	男				女		空き家
	人	%	人	%	人	%	軒
五戸通	11,927	(24.0)	7,315	(61.3)	4,612	(38.7)	1,018
雫石通	6,101	(12.3)	3,632	(59.5)	2,469	(40.5)	430
福岡通	5,446	(10.9)	3,190	(58.6)	2,266	(41.4)	1,132
沼宮内通	4,099	(8.3)	2,875	(70.1)	1,324	(29.9)	683
⋮							
⋮							
領内合計	49,594	(100)	30,993		18,601		7,043.5

注、1) 「篤馬家訓」巻之九より作成。

2) 男女の（ ）内の数字は各通における男女の割合を示す。

表2 宝暦5年の欠落と火事

月	欠落者数	出火件数	類焼	馬焼死
	人	件	軒	疋
1	33	6	8	2
2	31	7	2	13
3	33	11	72	7
4	23	2	22	-
5	5	4	22	1
6	7	-	-	-
7	2	1	-	-
8	11	1	-	1
9	27	5	7	-
10	31	4	2	-
11	85	10	64	3
12	44	4	24	-
計	332	55	223	27

注 宝暦5年の「雑書」より作成。

候、依之、銘々支配所中江御代官共油断無之様、兼て申合置候儀ニは可有之候得共、猶亦此節火之元用心厳敷、御百姓共江可申付旨被仰出候間、御代官共江申渡候様、目付に申し渡している。⁽⁴⁴⁾

第三節 宝暦六年の飢饉

宝暦六年（一七五六）は前年の飢饉の影響を強く受けていた。特に種籾が悪かった上に、七月中旬頃から雨が降り続き、洪水や水押もあり、八月まで天候不順で、特に「盆中打続て霖雨冷氣にて凶作」となった。一月十二日、藩主の南部利雄は次のような指令を出した。⁽⁴⁵⁾

宝暦六年は去年の凶作によって「世上疑敷義」もあるようだ。特に今年は「火之元并銘々屋敷等」の用心が第一なので、夜中は鳴子や拍子木を使わせて用心させる。もつとも夜中急用の時は格別であるが、そうでない時は召使を通行させないようにする。使い等に出す節は提灯または夜札を持たせる。そして騎馬火の廻りの者などに行きかかって尋問された時は、主人の名字と役用で通行している旨を申し出るようにする。さらに、夜中に頭巾や頬被（ほほかぶり）をして通行する者がいるようであるが、寒中以外は禁止する。この節、世上に不審者がいるので、それと紛らしく見えるのは困るからだ。ただし、一五歳以下の子供や老人は格別なので許可をする。

というものである。飢饉時における不審者の注意と火の用心の大切さが伝えられたのである。

翌一月十三日になると、「雑書」に、

一当年柄之儀故、諸士丁町々共二飢人等二紛、疑敷徒者も可在之、殊火元等之儀共二無覚束事ニ 思召候、依之御町奉行ハ屯人宛、御目付は御用透之者申合、諸士丁町々并端々迄も昼夜相廻候様ニ被 仰付、尤御徒目付共も昼夜相廻可申旨、御町奉行、御目付江於席申渡之、とあるように、盛岡城下には飢人などに紛れ、「疑敷徒者」もいる。これは火の用心とともに心配なので、町奉行、目付、徒目付などが昼夜にわたって巡廻することになった。

次いで二月十五日には、米穀が不自由で通用に支障がある上、在方から城下へ入ってくる穀物も郷留等によって差し支えている。それでは困るということで、「在々穀留之儀」は解禁された。ただし、こうなると他領への抜米等もあるかも知れないので、藩境はこれまでどおり穀留を実施し、なかでも特に「八戸御領志和境」は厳重に穀留することが、目付や勘定頭に伝えられた。⁽⁴⁶⁾

こうして三月に入ると、飢渴の者が段々と増えてきた。「雑書」宝暦六年三月七日条をみると、次のようにある。⁽⁴⁷⁾

一御領分中去年凶作ニ付、御城下在々共飢渴之者貳万三千八百拾七人在之、御救方段々被 仰付置候、依之大勢之儀故、一度ニ御届被 仰上候てハ、殊之外夥敷義相聞得、自然一度ニ被 仰上候段、御不審之程難計ニ付、先此度ハ、壹万人余と御届可然旨申出候付、御届書左之通、

私領分去年作毛不熟損毛ニ付、飢渴之者段々在之、当春ニ付、此節迄凡壹万人余御座候、依之右之者共救方申付、手当仕置候、此段申上候、被御聞置可被下候、以上、

三月七日 御名(南部利雄)

右之通御届仕候旨申来、遂披露、

右によると、これまで城下と在方で合計二万三八一七人の飢渴者を救済したが、大勢なので、これを一度に幕府へ報告しては、「殊之外夥敷義相聞得……御不審之程難計ニ付」、まずこの度は、一万人と届け出ることになったのである。これと同様の文面は同年三月十九日条にもある。

四月になると、江戸留守居見習の吉田七郎兵衛が四月五日付の凶荒報告書を、御用番老中の西尾隠岐守忠尚に提出している。それは次のようなものであった。²¹⁾

一御届書左之通、

私領分去年作毛不熟ニ付、飢渴之者在之、救方申付、手当仕候段先達て申上置候、然処其以後此節迄、飢渴之者五千六百余人余出申候、先達て申上候人高、都合壹万五千八百三拾五人御座候、是又救方申付、手当仕置候、此段申上候、被御聞置可被下候、以上、

四月五日 御名(南部利雄)

これによると、三月七日付で飢渴者を「凡壹万人余」と幕府に届け出てから、さらに四月までに飢渴者が五六〇〇人余も出現したので、合計で一万五八三五人に達し、これを救済したという。しかし現実的には、三月七日段階での飢渴者は二万三八一七に達していたのであるから、四月五日付の凶荒報告書にある飢渴者の増加分五六〇〇人余を加算すると、三万人に近い(二万九四〇〇人余)飢渴者が発生していたことがわかる。

四月五日には、上田通、飯岡通、栗谷川通、向中野見前通の代官に対して、次のごとく申し渡している。²²⁾ なお、「通」(とお)とは代官支配区域のことである。

一この間たびたび「捨物等」(餓死者などを意味している)があり、他領者が見かけては外聞も悪いので、往還筋はいうまでもなく、作場道、小堰等に至るまで、肝入や百姓たちが気をつけて巡廻し、「捨物」があったならば、犬猫に至るまで処理し、目障り等にならないようにすること。

一疲れているような人が見えたならば、どこの者かを尋ね、盛岡領の者ならば、永祥院と円光寺のお救小屋へ送遣し、流浪しないように取り計る

こと。他領者であれば、盛岡領も去年の凶作で「袖乞等之義不相叶旨」を知らせ、行き先を聞いた上で宿送りをすること。

一捨子等があつたならば、近くの百姓どもに引き取らせ、食事などを与えてから肝入へ報告させること。その賄代は藩で支給する。もし見逃したり、不法の対応等をした場合は厳しく処罰する。

というものであつた。

盛岡城下では「輕キ者共段々渴命」に及ぶ者が多くいるので、総検断が相談の上、「御救米」の下賜願を再三願ひ上げた結果、四月十四日より救助米が各町内ごとに支給されることになった。⁽³³⁾ もつとも「五月初頃より他領米追々新山へ入船有り」、「端午過二至て他領米追々入来ル」⁽³⁵⁾とあるように、北上川の盛岡城下新山河岸に「伊達、桑折、岩城、相馬、会津の五ヶ所」⁽³⁶⁾の他領米が廻送されるようになっていたのである。救助米の支給は「一日壹人ニ付、壹合八夕積」⁽³⁷⁾で、その期間は「四月十四日より八月晦日迄、日数都合百三拾五日程」に及んだ。⁽³⁸⁾ 町内ごとの救助米受給者の数をみると、久慈町四三人、材木町五二人、長町二七五人、三戸町一五〇人、寺町一四二人、八日町七三人、大工町一四二人、本町六三人、油町一一四人、紙町一八人、鍛冶町一〇四人、紺屋町一七九人、葺手町五〇人、八幡町二九七人、肴町五四人、新町一八人、六日町七四人、十三日町八五人、馬町一〇三人、石町一四九人、川原町二六人、仙北町一八二人となり、総数で二五九三人に達している。⁽³⁹⁾

また、八戸弥六郎の知行所遠野の場合であるが、宝暦六年四月十日には、水戸で購入させた稗二〇〇〇俵が海路釜石浦に着岸していることが知られている。⁽⁴⁰⁾

五月一日になると、諸代官に対して、「在々之人民」が困窮し、飢渴に及ぶ者が多数いるので空き家も多くなり、無用心から家の焼失が続いている。飢饉という非常時なので、「別て明家等ハ肝煎并組頭抔心を合、随分無油断時々見廻し、徒者并火之元用心等」を嚴重に申し付け、さらに、

一先達て度々被 仰付候通、近在并遠在とも二此節及飢渴、山林、野道、山道、作場道、往還通二も倒死候者数多在之候得共、取仕廻片付等も不仕、其俣差置候様相聞得、他所江之御外聞共、以之外不宜義二候、畢竟兼て度々被 仰付置候ても行届兼候義と相聞得候、龜末之至二候、向後能々申合、往還筋ハ不申及、山道、野道、作場道、山林等二倒死候者在之候ハ、其所江埋置候様二、平生之様二念を入、急度ハ取仕廻不申候とも、埋置屍等取乱し不申様二能々可申付候、勿論 御城下近在之義は先頃も度々段々被 仰付置候処、今以 御眼障候者も在之、川筋通りともし心を用ひ遂吟味、流し候ても流兼候ハ、其近辺江取上ケ埋置候様可仕候、此度又々被 仰出候間、銘々支配限急度相心得、時々申合、右 躰之者無之様為仕、疎二心得不申様可申付旨、
が申し渡された。⁽⁴¹⁾

右からも明らかなように、「倒死候者」は行倒人が多数いるにもかかわらず、片付けもせずそのままに置いては、他領への外聞もよろしくないので、これからは往還筋はいうまでもなく山道、野道、作場道、山林等に行倒人がいたならば、その処に埋め置くよう、不断から注意することが伝えられた。また、川筋通りの場合は川に流すようにする。もし流しかねたならば、その近辺へ取り上げて埋め置くことが申し渡されたのである。

こうして閏十一月になると、次のような凶荒報告書が幕府に提出されるようになった。⁽⁶²⁾

一公義へ御届書写左之通、

私領内去年不作ニ付、種粃別て不宜、苗長兼、其上当七月中旬頃より雨降続、川々洪水、水押等も在之、(八月迄)⁽⁶³⁾ 天氣不順ニて田畑実入不熟ニ相成不作仕、損毛高左之通、

本高拾万石之内

一損毛高三万六千六百三十拾石余

新田高拾四万八千石之内

一損毛高五万九千八百八拾石余^(四四)

合九万五千八百拾四石余

一人馬怪我無御座候、

右之通御座候、此段御届申上候、以上、

閏十一月十六日

御名(南部利雄)

これによると、宝暦六年の損耗高は本高で三万六千六百三十〇石余(損耗率三六・六パーセント)、新田高で五万九千八百八拾四石余(同四〇・〇パーセント)、全体では九万五千八百拾四石余(同三八・六パーセント)であった。

また、「人馬怪我無御座候」と届け出をしているが、実際には、「此節及飢饉、山林、野道、山道、作場道、往還通ニも倒死候者数多在之」⁽⁶⁴⁾とあるように、かなりの餓死者がいたのである。横川良助の「飢饉考」にも、宝暦六年三月の一・二の両日で永祥院と円光寺のお救小屋の飢人が「六拾人ニ近く餓死」⁽⁶⁵⁾し、沼宮内通の田頭、大更、西根辺で「飢人凡弍千余人ニ及ふ、旧冬より追々餓死既二八、九百人ニ余れり」と記されている。また、八戸弥六郎の知行所遠野の餓死者は宝暦五年の九月から翌年四月十六日迄で一一五一人に達していたという⁽⁶⁷⁾。

宝暦六年はこのような餓死者のほかに、「雑書」を見ると、おびただしい数の欠落者が生じていたのである。この一年間で一七一五人が欠落ちしてい

るが、欠落者の多い月は閏十一月で五六二人（全体の三二・八パーセント）、次いで十一月の一九四人、十二月の一六三人であった。十一月から十二月までの三か月（閏十一月があつた）で九一九人（全体の五三・六パーセント）に達し、食料の欠乏している時節に欠落者が多く出ていることがわかる。

おわりに

本稿では、盛岡藩領における宝暦五年（一七五五）の大飢饉を中心にして、岩手県立図書館に所蔵されている「自然未聞記」と盛岡市中央公民館に所蔵されている「雑書」を主たる史料として具体的に検討を加えてみた。

これまでの考察からすでに明らかのように、宝暦五年は、五月から天候不順で連日降雨が続き、夏の土用にもなお寒気を覚えるほどの典型的な冷害で大凶作となり、田畑の合計で一九万九七〇〇石余の損耗となつた。この数字は盛岡藩の内高にほぼ匹敵する量である。この大凶作を契機にして大飢饉となつた宝暦五年は、十二月になると、城下の久昌寺と報恩寺が飢人の救済に乗り出し、翌年正月、藩では城下の商人などからの御用金を資金として、城下の永祥院と円光寺に藁葺きのお救小屋を建て、飢人の救済を開始したが、そこでの施行粥があまりにもひどかつたので、毎日五〇人前後の飢人が餓死あるいは凍死を余儀なくされ、ついに全領では餓死者四万九千五百九十四人、空き家七〇四三軒半という被害を出す大飢饉となつたのである。

このような結果を招いた原因は、大凶作のほかは人為的なものがあつたからである。宝暦四年の盛岡藩領は豊作だったので、江戸での米価高をねらつて江戸廻米を実施したため、同五年には、領内に米が払底して飢人の救済ができなかつたからである。江戸廻米の量をみると、八〇九万石、あるいは一〇万石といわれている。このような膨大な量にのぼる米を江戸市場で売却し、その利潤をもつて、総額七万両余といわれた日光本坊の普請手伝に伴う費用にあてるとともに、城下商人などの借上金の返済に差し向けようとしたのである。

宝暦六年は前年の飢饉の影響を強く受けていた。特に種粃が悪かつた上に、七月中旬頃から雨が降り続き、洪水や水押等もあり、八月まで天候不順で凶作となつた。その結果、本田と新田の合計で九万五千八百一十四石余の損耗で飢饉となつた。

藩では火の用心、不審者の取締り、穀留、飢渴者の救済などにあたつた。四月になると、全領で三万人に近い飢渴者を救済していたが、一方では、年間で一七・一五人にも及ぶ欠落者を発生させると共に、多数の餓死者を出すに至つたのである。

宝暦七年なると、盛岡城下には二月頃まで流浪する飢人もいたが、この年は「各別暖気也、誠に春めき十月小春也、惣て当秋中日和打続、農業至極宜仕廻也」といわれているように、豊年であつたことが知られている。しかも、「当年八春中より米穀別条高直ニも無之、曾て田畑草生ひ、景気よろし

く諸人見ぬ秋を宜前表す、去年飢饉をのかれ豊年に逢ふ事、誠に仏神の御加護、誠に豊年の昔に帰候様ニ遊興乱舞⁷³」していたというのであるから、この年は春中から豊年となることが期待されていたのであった。

なお、藩政後期の歴史家横川良助（一七七四～一八五七）は、「飢饉考」を編述した人物としてよく知られているが、宝暦の飢饉については、自分が体験していなかったので、「自然未聞記」を底本にして「飢饉考」の一部をまとめたのである。その際、ただ丸写しではなく、自らが収集した若干の史料を付け加えて文章を改変するなどしている。

註

- (1) 細井計「襲いくる凶作・飢饉」（細井計責任編集『図説岩手県の歴史』一六〇頁、河出書房新社、一九九五年一〇月）、同「飢饉」（川本忠平総監修『岩手百科事典』一七〇頁、岩手放送株式会社、一九七八年一〇月）。
- (2) 滝本誠一編『日本経済大典』第二十六巻、五二八頁（明治文献、一九六九年八月）。
- (3) 同右、五二三頁。
- (4) 同右、五二六頁。
- (5) 小鹿島果『日本災異志』一～五四頁（思文閣、一九七三年一月復刻）。
- (6) 滝本誠一、前掲書、五二八頁。
- (7) 細井計「凶作」「凶作年表」（前掲『岩手百科事典』一九五～六頁）。
- (8) 盛岡藩の四大飢饉の概要については、前掲『図説岩手県の歴史』一六〇～一六四頁で触れておいた。
- (9) 細井計「盛岡藩」（木村礎、藤野保、村上直編『藩史大事典』第1巻北海道・東北編、六一～一二頁、雄山閣、一九八八年一〇月）。
- (10) 盛岡市中央公民館蔵。なお、この「雑書」については、これまで多くの人々の協力を得て、現在、筆者が責任校閲したものが『盛岡藩雑書』（熊谷印刷出版部）として第十五巻（享保十七年～同二十年）まで、次いで『盛岡藩家老席日記雑書』（東洋書院）と改題して第十八巻（寛保二年～同三年）までが刊行されておおり、目下第十九巻以降を出版すべく準備している。しかし、宝暦年間のものはまだ翻刻されていない。
- (11) 森嘉兵衛『日本僻地の史的研究』上巻、八八四頁（法政大学出版局、一九六九年八月）。
- (12) 滝本誠一編『日本経済大典』第三巻、二二頁（明治文献、一九六六年七月）。
- (13) 細井計「盛岡藩領における元禄八年の飢饉」（『岩手史学研究』第八十号、平成九年三月）。
- (14) 岩手県立図書館蔵「自然未聞記」宝暦五年一月条。なお、横川良助の「飢饉考」（『岩手史叢』第8巻、岩手県文化財愛護協会、一九八四年六月）の宝暦の記事は、「自然未聞記」をもとにして編集されている。
- (15) 前掲「自然未聞記」宝暦五年五月条。
- (16) 前掲「自然未聞記」宝暦五年六月条。

- (17) 同右。
- (18) 前掲「飢饉考」、二三頁。
- (19) 盛岡五ヶ寺とは、真言宗の永福寺、臨済宗の聖寿寺と東禪寺、曹洞宗の報恩寺、時宗の教浄寺の五ヶ寺のことをいう。臨済宗の寺院だけでないので、従来の「盛岡五山」の表記は誤りである。
- (20) 盛岡市中央公民館蔵「雑書」宝暦五年七月十七日条。
- (21) 前掲「自然未聞記」宝暦五年七月条。
- (22) 同右。
- (23) 前掲「飢饉考」、二六頁。
- (24) 前掲「自然未聞記」宝暦五年八月条。
- (25) 前掲「雑書」宝暦五年八月二十六日条。
- (26) 同右、宝暦五年九月二十六日条。
- (27) 同右、宝暦五年九月十四日条。
- (28) 同右、宝暦五年九月二十五日条。
- (29) 同右、宝暦五年十月十三日条。
- (30) 同右、宝暦五年十一月五日条、十一月八日条。なお、同様のものが岩手県立図書館蔵、山口泰款「泰款雑秘抄」巻之七に収録されている。
- (31) 前掲「自然未聞記」宝暦五年十月条。
- (32) 同右、宝暦五年十一月条。
- (33) 同右、宝暦五年十二月条。
- (34) 同右。
- (35) 同右。
- (36) 同右。
- (37) 同右。
- (38) 同右。
- (39) 同右、宝暦六年一月条。
- (40) 同右。
- (41) 同右。
- (42) 同右。
- (43) 盛岡市中央公民館蔵「篤焉家訓」巻之九。
- (44) 前掲「雑書」宝暦五年三月二十九日条。
- (45) 盛岡市中央公民館蔵「雑書」宝暦六年閏十一月二十六日条。

- (46) 前掲「飢饉考」、九〇頁。
- (47) 前掲「雑書」宝暦六年一月十二日条。
- (48) 同右、宝暦六年一月十三日条。
- (49) 同右、宝暦六年二月十五日条。
- (50) 盛岡市中央公民館蔵。
- (51) 前掲「雑書」宝暦六年四月十九日条。
- (52) 同右、宝暦六年四月五日条。
- (53) 前掲「飢饉考」、七三頁。
- (54) 同右、七五頁。
- (55) 同右、八四頁。
- (56) 同右、八四頁。
- (57) 前掲「自然未聞記」宝暦六年四月条。
- (58) 同右。
- (59) 同右。
- (60) 吉田義昭氏蔵「凶作見聞集」、奥羽史談会の吉田義昭・星川香代両氏のご教示を得た。
- (61) 前掲「雑書」宝暦六年五月一日条。
- (62) 同右、宝暦六年閏十一月二十六日条。なお、同じようなものが同年十二月十日条にもある。
- (63) 「雑書」宝暦六年十二月十日条の記述をもつて補足した。
- (64) 同右、宝暦六年五月一日条。
- (65) 前掲「飢饉考」、七二頁。
- (66) 同右、七三頁。
- (67) 前掲「凶作見聞集」。
- (68) 前掲「自然未聞記」宝暦四年条。
- (69) 森嘉兵衛「奥羽社会経済史の研究・平泉文化論」三一五頁（法政大学出版局、一九八七年一月）。
- (70) 前掲「飢饉考」、一五頁。
- (71) 前掲「自然未聞記」宝暦七年二月条。前掲「飢饉考」、一〇二頁。
- (72) 前掲「自然未聞記」宝暦七年十月条。
- (73) 前掲「自然未聞記」宝暦七年四月条。

（付記）

本稿は平成十七年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究成果の一部である。